

平成 23 年 12 月 22 日

『地震総合訓練』の講評

副学長 五十川 隆夫

寒い中お疲れ様でした。毎年 1 回はこの種の災害に関する訓練を行っています。今回の訓練は、東海地震、東南海地震の発生を想定して行いました。今日は、大府市消防署の皆さんにも協力をいただき、実施することが出来ました。併せて地震発生時に大学としてどのような自衛消防組織を編成し、初期消火にあたるのかという体制づくりの確認を行いました。職員が各役割を記したゼッケンを着用しているのはその意味です。皆さんの避難訓練と併せて災害対策本部の設置並びに自衛消防組織の編成等について訓練を行いました。

今日は、あらかじめこの時間帯で地震が発生し、避難することが分かっていたので、皆さんはのんびりとおしゃべりをしながらこの場に集まっていました。避難に約 10 分弱の時間を要したとのことですが、実際に有事が発生した場合にはそのようにはいきません。記憶に新しい 3 月 11 日の東日本大震災では、たいへん多くの方が亡くなりました。必死に逃げても、あの大きな津波にのまれてしまった方々もいます。最近、いろんな学者グループが東日本大震災において被害者が何故多かったのかということを検証しています。その中に、「地震に対する意識の低さ」や「訓練に参加していなかった」ということが生死を分けたのではないかと報告も出ています。その意味で今日はひとまず訓練をしましたが、あの程度の緊張感ではおそらく命を落とす危険もあるのではないかと思います。一瞬一瞬、その時々を大事にしながら素早く自分の体験・経験に基づいて行動することが必要であると思います。皆さんには震災発生時における学生の心得や、大地震対応マニュアルを配付していますので、それらをよく読んで頭の中に入れておいてください。ただし、知識だけでは命を救うことはできません。知識というのは、体験・経験を通して自分の知恵となり、はじめて命が助かります。このようなことを考えながら、まずは知識を身につけてください。

もう一つ、「自分の身は自分で守る」ということで、皆さんがこのグラウンドに辿り着いたとします。隣には附属幼稚園があります。場合によっては附属幼稚園の園児たちの救出に行かなければならないという次の仕事があるかもしれませんし、皆さんが大人としての対応が求められる場面に出くわすと思います。東日本大震災の時も、足の弱い人、或いはお年寄りを背負ったり、手を引いて必死に逃げた若者たちが沢山いました。このような状態も考えておかなければならないと思います。

最後になりますが、本学としてはこれからもこの種の訓練を数多く重ねていきたいと考えています。不可抗力でどうしようもないこともあります。訓練を繰り返すことによって命が助かる、誰かを助けることにも繋がると考えます。今日は、全学生のうち約 3 分の 1 強の参加者数でしたが、これからも訓練に積極的に関わってほしいと思います。本日参加した学生、教職員、並びに大府市消防署の方々に感謝申し上げます。

以上